

＜金融史パネル＞

国際金融センターの機能と国際銀行業：競争と補完の史的分析

＜主旨＞

東北大学 菅原歩

西村閑也・鈴木俊夫・赤川元章編著『国際銀行とアジア：1870－1913』（慶應義塾大学出版会、2014年）は、英仏独日の為替銀行の新たな一次史料発掘を基礎とした、アジアの為替銀行史の最新の到達点である。本パネルでは、『国際銀行とアジア』後の国際銀行史研究の発展方向を探るために、時期的には第一次大戦以後を、地域的にはアメリカを、それぞれ視野に入れる。第一次大戦以後の国際金融史における最大の変化はニューヨーク国際金融市場の台頭と、その結果としてのロンドンとニューヨークという2つのグローバル金融センターの併存であった。そのため本パネルでは、このグローバル金融センター間関係に焦点を当てる。

従来は、ロンドン市場とニューヨーク市場の関係については、金融センター間の競争という観点から論じられることが多かった。しかし近年、国際金融センター間関係については、ロンドンとニューヨークや香港とシンガポールに関して、競争よりも補完性の観点を強調する研究が出てきている。そこで、本パネルは、この補完性の観点を第一次大戦以前から1920年代の時期にわたって適用し、競争と補完性の双方の観点から、2つのグローバル金融センター間関係を考察する。具体的には、一次史料に基づき、商業銀行、為替銀行、投資銀行が2つのグローバル金融センターをどのように利用したのか、言い換えると、国際金融センターが借り手と金融機関に何を提供してきたのか、という点を検討していきたい。

第一報告（古賀報告）は、第一次大戦以前のロンドン市場とニューヨーク市場の関係を、イギリスとアメリカの代表的な大手商業銀行の行動を通して検討する。

第二報告（北林報告）は、20世紀初頭から1930年のニューヨーク市場の発展について、イギリスの為替銀行であるチャータード銀行のニューヨーク支店を題材にして検討する。

第三報告（鈴木報告）は、1870年代から1930年の時期についてのイギリスのマーチャントバンクとアメリカの投資銀行の活動を取り上げ、ロンドンとニューヨークの資本市場の関係を考察する。